

杉蔵を送る叙

(戊午幽室文稿) 安政五年(一八五八) 七月十一日 二十九歳

胥徒杉蔵、飛脚を以て帰る。帰りて数日、復び亦、途に上る。杉蔵は胥徒の微を以て、慨然として天下の事を談ず、急遽造次にも猶ほ能く吾が徒に従ひ、議論を上下し、娓娓として倦まず。其の志も亦奇なり。而して其の説も亦頗る吾れと同うす、吾れ深く之れを喜ぶ。然れども是れ皆讀書人の習気、何ぞ甚だしくは貴ぶに足らん。吾れの甚だ杉蔵に貴ぶ所のものは、其の憂ひの切なる、策の要なる吾れの及ぶ能はざるものあればなり。当今幕府の心は、路人も知る所、諸侯の、府下に在りて其の策を為す、亦難し。況んや吾が世子独り府邸に留まり、待衛の番士、下は銃槍の軽卒に及ぶまで、百人なる能はず。一旦変起らば何を以て此れに処せん。是れ誠に憂ふべきなり。而るに敢えてこれを憂ふるなし。唯だ杉蔵のみ是れ策し是れ憂ふ。余因つて謂つて曰く、「士卒百人、独り洪流の中に立つ、沈まざれば則ち漂はん。然れども天下の諸侯亦正論の者あり、豈に独り我れのみならんや。忠孝節義と雄才大略の者とは、或いは刀筆に隠れ、或いは技芸に隠れ、或いは市井田野の間に隠る、亦独り我れのみならんや。勅旨を奉じ、胡塵を清む、吾が志一たび定まりて、沈まず漂はざれば、其れ必ず来り助く

る者あらん。而るを況んや吾れ往きて之れを求むる、寧んぞ応ぜざる者あらんや。人帰して天与す、百人固より以て千万人を得べし、而ち何ぞここに難からん」と。杉蔵も亦深く之れを然りとす。余乃ち告げて曰く、「当今の江邸、長井は世子番頭たり、来島は大検使たり、皆有志の士なり。桂・赤川・日下と無逸・無窮とは高下深淺、各々自ら同じからずと雖も、要は皆知識あり、順逆を知る。是れ皆杉蔵の熟知する所なり。而して高杉・尾寺も亦東行の志あり。且つ聞く、近ごろ江邸に会約あり、一月数次、志士を湊合し、各々其の聞知する所を竭すと。然らば則ち何ぞ吾が言を待たん」と。吾れ幽囚廢錮、為すある能はずと雖も、近ごろ恩旨を蒙り、建言諱まざるを允さるるを得たれば、其れ徐ろに具して之れを奉らん。杉蔵往け。月白く風清し、飄然として馬に上りて、三百程、十数日、酒も飲むべし、詩も賦すべし。今日の事誠に急なり。然れども天下は大物なり、一朝奮激の能く動かす所に非ず、其れ唯だ積誠之れを動かし、然る後動くあるのみ。七月十一日

解説

入江杉蔵二十二歳、飛脚として江戸から帰国した時、初めて松陰を訪ねている。本文は、その数日後再び江戸に向かって出立する際に贈った送叙である。この数日の間に松陰は、「吾れの甚だ杉蔵に貴ぶ所のものは、その憂ひの切々なる、策の要なる吾れの及ぶ能はざるものあればなり」と杉蔵の本領を見抜いている。杉蔵は松陰に深く師事し、松陰の晩年には、思想や心情において最も身近にあって行動した人物である。本文末尾の「杉蔵往け。月白く風清し……」は名文として知られているが、それはただに美しい文章であるだけでなく、「天

下は大物なり」と言い切って杉蔵の覚悟を新たにさせるとともに、彼に大きな期待を寄せていることで迫力と説得力を持っている。

用語解説

入江杉蔵 〓 一八三七〜六四 長州藩足軽、のち士分。名は弘毅こうき、字は子遠しえん、杉蔵は通称。

村塾入塾は安政五年、十一月。その四ヶ月前の七月に江戸から飛脚として萩に使いした時、初めて松陰から教えを受けた。

胥徒しよと 〓 小役人。雑役夫。

飛脚 〓 江戸時代、手紙などを運送した者。

微び 〓 卑しい、取るに足らないの意で、ここでは身分が低いこと。

慨然がいぜん 〓 憤り、嘆くさま。

急遽造次きゅうきよぞうじ 〓 にわかで、慌しい時。

上下し 〓 往復する。交わす。

媿々びびとして倦うまず 〓 議論が続き、飽きることが無い。

読書人 〓 知識人。

習気しゅうき 〓 習慣。

其の憂ひの切なる、策の要なる 〓 杉蔵の憂いが切実で、その策は要点をついている。

路人ろじん 〓 一般大衆。

世子せいし 〓 藩主毛利敬親の後継者、定広（後の元徳）

府邸ふてい 〓 江戸の長州藩邸。

待衛じえい 〓 藩主を護衛する者。

軽卒けいそつ 〓 身分の低い兵卒。足軽。

士卒しそつ 〓 武士と足軽。

造流ぞうりゅうの中に立つ 〓 広大な流れの中に立つ。

豈あに独り我れのみならんや 〓 どうして、ただ私一人だけであろうか。

忠孝節義 〓 主君に忠義を、父母に孝行を尽くすこと。

雄才大略ゆうさいたいりやく 〓 優れた才能（雄才）と優れた計略（大略）

刀筆 〓 古代中国で、竹簡ちくかんに文字をしるすために用いた筆と、その誤りを削るために用い

た刀。転じて文書の記録、あるいは著述。

技芸 〓 美術、工芸に関する技能。

市井田野しせいでんや 〓 俗世間。田舎。

胡塵こじんを清む 〓 異民族（外敵）を払いのける。

其れ寧んぞ応ぜざる者あらんや 〓 どうして、応じない者があるうか。

人帰して天与す 〓 多くの人が慕い、寄ってくるし、

天もまた味方してくれる。

江邸こうてい 〓 江戸の長州藩邸。

長井 〓 一八一九〜六三 幕末の長州藩士。名は時庸ときよし。雅楽は字。藩主の親任厚く直目付じきめつけ

に進む。文久元年、幕府の開国政策に対し、「航海遠略策」こうかいえんりやくさくを建議し、主命を受

けて江戸で公武周旋しゅうせんに当たったが建白書けんぱくし謗詞事件のため失脚。帰萩後きしゅう、切腹を

命じられた。

来島きじま 〓 一八一七〜六四 名は政久。長州藩士。安政二年、大検使役だいけんしやく。文久三年、下関で

外艦砲撃戦の時、総督国司信濃そうとくくにししのの参謀を務める。元治元年、禁門きんもんの変に死す。

桂・赤川・日下と無逸くさか むいつ むきゆう 無窮むきゆう 〓 桂小五郎・赤川淡水あわみ・久坂玄瑞と吉田栄太郎。

松浦亀太郎

高下深淺こうげしんせん 〓 身分の上下、学識の深淺。

順逆じゆんぎやく 〓 道理に叶っているか否か。

高杉・尾寺 〓 高杉晋作・尾寺新之充。

東行とうこう 〓 江戸へ赴くこと。

会約かいやく 〓 会合。

一月数次ひとつきすうじ 〓 一ヶ月に数回。

湊合そうごう 〓 寄せ集める。

幽囚ゆうしゆう 〓 捕われて一室内に閉じ込められ、官吏の資格も剥ぎ取られている。

近ごろ恩旨を蒙り、建言いみな諱まざるを允いんさるる 〓 藩主毛利敬親が安政五年（一八五八）六月一五日に江戸より帰萩し、松陰の認めた「狂夫の言」を見て、更の上書建言するように伝えられ、それを聞いて松陰が藩主の恩に感激した。

飄然ひょうぜん 〓 ひらりと。

詩も賦ふすべし 〓 漢詩もつくるがよい。

一朝いちちよう 〓 わずかの間。

積誠せきせい 〓 真心のこもった行為を積み重ねること。

[吉田松陰の名文・手紙を読む【目次】ページへ戻る](#)

[吉田松陰.com トップページへ](#)